

日韓兩國語同系論

金澤庄三郎

韓國の言語は我日本帝國の言語と同じ系統に屬するもので、彼は我か一方言に過ぎぬ。丁度、琉球語の我帝國語に對すると同じ關係で、西洋の例でいへば、一チユートン語族中の獨逸語と和蘭語、一ローマン語族中の佛蘭西語と西班牙語と同じ様なものである。此事は決して新しい事實でもなければ、珍しい考でもない。既に屢東西の學者の論じたところで、又苟くも皇國の古典に眼を曝したものと、考へ到らざるを得ないことである。

素戔鳴尊の新羅國曾戶茂梨に天降りたまひたること、延喜式神名帳及び風土記等に、韓國の神社名の見えたること、新撰姓氏錄右京皇別に新良貴の姓あることなどは、いつも日韓の上古に離すへからざる關係あることを證明する歴史上の事實であつて、文學博士星野恆先生は、此等の諸點より立證して、上世日韓の一域にして、嘗て皇祖の新羅を統治したまひたることを斷言せられて居る。(史學雜誌第一編第十一號「本邦の人類言語に付鄙考を述べて世の眞心愛國者に質す」参照)而已ならず、韓國の史籍に徴する

も、新羅王脫鮮尼師今は我國より渡韓したものらしく、(三國史新羅本紀「脫鮮本多婆那國所生也其國在倭國東北一千里」、其即位の年(西曆五七)同しく我國人である、瓠公といふものを大輔として政事を執らしめて居る、(三國史新羅本紀「瓠公者未詳其族姓本倭人初以瓠繫腰度海而來」)其他、天日槍を始とし、上代に韓人の歸化するものゝ多かつたことを考へ合せるゝ、略兩國の關係も分かるのである。

かくの如く、彼我交渉の頻繁であつたに係らず、言語の不通といふことは一向認められぬ。三韓使節の朝貢、阿直岐王仁の來朝の場合など、いつれもさうであつて、所謂譯語の名の史上に見えたのは、反つて交通の稍疎くなつた後であるのは奇といはねはならぬ。即ち、日本書紀雄略天皇七年(西曆四六三)に譯語卯安那、天智天皇紀二年(西曆六六三)に神前臣譯語の名見え、天武天皇紀九年(西曆六八一)に新羅遣沙凜金若弼大奈末金原升進調則習言者三人從若弼至、續日本紀淳仁天皇天平寶字四年(西曆七五九)に新羅國遣級凜金貞卷朝貢中略本國王令齎御調貢進又無知聖朝風俗言語者仍進學語二人同五年(西曆七六〇)令美濃武藏二國少年每國二十人習新羅語爲征新羅也とあり、また日本逸史嵯峨天皇弘仁四年(西曆八一三)に停對馬島史生一員置新羅譯語一人中略言語不通來由難審彼此相疑、三代實錄清和天皇貞觀五年(西曆八六三)に五十四人來着竹野郡松原村問其來由言語不通文書無解其長頭屎鳥舍漢書荅云新羅東方別島細羅國人也な

こ、先づ概略斯様な始末であつて、古代に於ける兩國の言語に差異の甚しくなかつたことは想像せられるのである。

近年に至つて、此兩國語の關係問題は増々内外諸學者の注意を引くやうになつた。外國の學者の中には、我國語とアリヤン語族又はフィン語・トルコ語・ビルマ語との比較を試みた人々もあるか、此等はまた一家言たるに過ぎないので、學界に何等の影響をも及ぼして居らぬ。然るに日韓兩國語の關係に就ては、外人中、我國語に精通の聞えあるアストン氏 (*A Comparative study of the Japanese and Korean Languages*, London 1879)、チエーンバレン氏等によりて夙に唱へられ、今日に至るまで、いまだ一も反對の聲を聞かないのである。我國に於ても、昔から此問題に腐心した學者も少くはないか、過去は暫く措き、現在に於ては白鳥博士の如き、宮崎博士の如き、一は歴史、一は法制の方面から、韓語を研究せられた結果、兩國語同原説に一致せられて居る。即ち白鳥博士の、日本の古語と朝鮮語との比較 (國學院雜誌第四卷第四號以下)、國語と外國語との比格研究 (史學雜誌第十六篇第二號以下) 等、宮崎博士の日韓兩國語の比較研究 (史學雜誌第十七篇第七號以下)、日本法制史の研究上に於ける朝鮮語の價值 (史學雜誌第十五篇第七號、及び、法學協會雜誌第二十二卷第四號以下) 等に於て之を見るべきである。

新らしくも珍らしくもない此事實か、實際世間に餘り知れて居らぬのは、甚だ遺憾で

ある。一般の人々は固より、口に韓語を操つて居る人の中にも、此兩國語がこれ程近い間柄であるかといふことを覺つて居る人は、あまり多くあるまいと想像する。のみならず、言語を専門とする學者の中にすら、また此兩國語間の關係を認めぬと、公言する人あるに至つては、眞に驚くの外はない。いつもながら、外國學者の眞摯熱烈なる研究の態度に對して、我邦人の東洋研究に冷淡なるを慨せざるを得ない次第である。

政治上榮枯盛衰の常ならさることは過去の歴史の示すところであるか、人工の左右し得ざる言語は、獨り綿々として今に至るも尙且往古の俤を残して居る。此間の消息を知ることとは、啻に學術研究者に於てのみならず、苟も報國の志あり、殊にまた朝に野に業を韓國に執るものと、當さに知悉すべき事柄ではあるまいか。かゝる感想の下に、筆を驅つて本篇を草することになつたのであるか、由來言語に關する議論は、こかく難澁に陥り易く、隨て讀者の倦怠を招き易い。今勉めて此弊を避けんと試みはしたか、讀者に於ても亦筆者の意を諒せられて、全篇通讀の勞を取られんことを切に希望するのである。

第一章 音韻の比較

聲音は言語比較の根底たると同時に、又其方針を誤らしむる基因となるものである。言語が聲音より成り立つて居る以上、之を外にして、何事も出来ないことは無論であるか、徒らに其外形にのみ拘泥しては、反つて誤謬に陥り易い。聲音の變遷には嚴密なる法則があつて、外見上全く違つた音が共同の根本に歸着することもあれば、類似の聲音が全く異なる起原より出て居ることもある、故に言語の外形のみに依つて國語の關係を批評することは、至難の事業であると同時に、また極めて危險なることといはねはならぬ。且民族相觸れ文化相接する處に於ては、必らず言語の貸借が行はれる。日韓兩國間の如く歸化移住の多き場合（扶桑略記天智天皇四年百濟男女四百餘人來朝即移置近江國神崎郡又百濟男女二千餘人移于東國不論緇素皆賜官食」續日本紀元正天皇靈龜二年以駿河甲斐相摸上總下總常陸下野七國高麗人千七百九十九人遷武藏國置高麗郡、孝謙天皇天平寶字二年歸化新羅僧三十二人尼二人男十九人女二十一入移武藏國閑地於是始置新羅郡焉、等參照）に於ては特に然うてある。故に此借用語を識別することが必要であるか、或點以上に於てはこれかまた甚た六ヶ敷いことである。加之、偶然の暗合といふ場合も決して少くない。それ故、餘程確實な類形語の數が多くなければ、有力な材料とはならぬと、斯學の大家ブルグマン（Brugmann）教授もいつて居られる。此の如く、言語の外形上の比較は、一見容易なる如くして、其實勞多く効果尠い故、これを第二位に置

き先づ主として、言語内部の組織を研究するか得策である。然しなから、今暫く上記の諸點に顧慮することなく、専ら聲音の法則のみを規矩として、語彙の比較を試やう。

國語	韓語	國語	韓語
agi ¹	aka	小兒	針
ani	ani	豈	貼
ba	pa	場	畑
chiehi	chyöt	乳	鳩
chi-gaya	tteui	茅萱	鬚
goto ²	kät	如	開
ha ³	pyö	齒	尋
ha ⁴	pa	者	覓
hachi ⁵	pör	蜂	穗
hahur-u	päri	放	女陰
hak-u	pak	吐	外
hamo ⁶	païam	鱧	骨
hara ⁷	pära	原	望
		望	欲
		望	望

hukü-be ¹¹	瓢	pak	瓢	kari	雁	kirö-ki	雁
hure ¹²	村	pör	村	ka-ru ¹⁶	離	ka	行
hur-u ¹⁸	降	pur	吹	kasa	笠	kas	帽
ids-u	出	toi	化	kazu ¹⁷	數	kaji	類
idsu	何	öt	何	kata	傍	kyöt	傍
iba	岩	pau	岩	kata	堅	kut	堅
ihi	飯	pap	飯	ki-ku	聞	kui	耳
ih-u	云	ip	口	kir-u ¹⁸	斬	khar	刀
ika	大	kheu	大	kohori	郡	koour	郡
imo	女	am	女	koh-u ¹⁹	戀	kop	美
im-u ¹⁴	忌	mui-p	忌	konani ²⁰	前妻	kheunömi	正妻
ka ¹⁵	香	kho	鼻	kor-u	凝	ngor	凝
krachi	步行	köt	步	kowe	聲	kui	耳
kah-u	買	kap	價	ko-yomi ²¹	曆	hai	日
kak-u	搔	keutk	搔	kua-si	美	kop	美
kara-musi	莖	mosi	莖	kuki	岫	kokai	峴

kuino	蜘蛛	komeui	蜘蛛	moto	下	mit	下
kuma	熊	koma	熊	mura	村	maeur	村
kumo	雲	kuram	雲	mure	群	muri	儕
kuro	畔	kuröng	畔	muro	室	maru	舍
kusa	種	kaji	類	namari	鉛	nep	鉛
kusi	串	kos	串	na-mida	淚	nun-mur	淚
made ²²	迄	nit	及	nata	釵	nat	簪
mane-si ²³	普	man	多	natsu	夏	nat	畫
mata-si	全	moto	總	nobo-ru	登	nop	高
mata	又	mada	每	nom-u	叩頭	nima	額
me	芽	um	芽	nor-u	宣	nira	云
mi	身	mom	身	niko	熟	nik	熟
midsu	水	mur	水	nu	寐	nu-p	寐
mo	方	mo	方	nub-u	縫	nupi	縫
momo	百	man	多	omo	母	ömi	母
moro	衆	mora	都	oh-u	貢	öp	貢

sak-u	咲	ssak	萌	tats-u	立	tot	登
seba-si	狹	chop	狹	tats-u	斷	tteut	斷
siba	柴	syöp	薪	tatsuki	鐮	tokkeui	斧
sima	島	syöm	島	tods-u	閉	tat	閉
simi	衣魚	chom	蠹	tog-u	磨	tak	磨
si-toki	桑餅	ttök	餅	toki	時	ch'yök	時
si-uto ³⁴	舅	seui-api	舅	toma	苦	tteun	筵
so	衣	os	衣	tomo	友	tongmo	件
soko ³⁵	底	sok	內	tomo-si	乏	teunü	稀
soso-gu	濯	sis	濯	tori	鳥	tärk	鷄
sudji	線	chur	絃	tor-u	取	teur	入
su	巢	sa	住	totoki	蠶	tötök	蠶
suko-si	少	chök	少	tsuba	唾	chuma	唾
susu ki	芒	syusyu	林	tsuchi	土	tta	地
ta-ke ³⁶	竹	tai	竹	tsuna	襪	chima	裙
tar-u	垂	tar	垂	tsune	爪	thop	爪

tsu-m-u	積	tam	盛	uri	瓜	oi	瓜
tsure	連	tari	件	usi	牛	so	牛
tsuru	鶴	turni	鶴	wada	海	pata	海
tsuto	苞	tot	席	wase ^{ss}	早稻	iso	早
ah-anari ^{ss}	後妻	myonari	婦	wata-su	渡	pat	受
u-he	上	u	上	wi	井	u-mur	井
uma	馬	mar	馬	yoro-dsu	萬	yoro	衆

(1) 國語 *agi* — 韓語 *aka* 國語 *agi* は小兒といふ古語で、應神天皇紀に「伊弉阿藝」にあるのか、古事記の同じ歌には、「伊邪古抒母」になつて居るのを見ても分かる。韓語 *aka* は此古語を今まで傳へて居るので、矢張小兒の義である。滿洲語にも、父母の子を呼ぶ詞に *age* *にい* のがある。相照して参考すべき價值があらうと思ふ。

(2) 國語 *goto* — 韓語 *kat* 國語の形容詞、「如し」の語幹 *gote* は、韓語形容詞 *kat* (同) と同系の語である。國語且 (*katsu*)、每 (*goto*)、旁 (*kata-gata*)、gate-ra (「花見から」の類) も皆これと同一語根から出たもので、何れも二物に對する關係の相同きことを示して居る。

(3) 國語 *ha* — 韓語 *pyo* 國語 *ha* (齒) は韓語 *pyo* (骨) と同語であらう。先づ

音韻の上からいへは、國語の h 音は韓語では必ず p 音となる定まりで、例へは、國語 hude(筆)——韓語 put (筆)、國語 hata (畑)——韓語 pat (田)の類、皆左様である。國語 h の古音か p てあつたことについては、種々の證據があるので、つまり、韓國には此古音が傳はつて居るのである。さて、人間の身體中、外部に露はれて居る骨質のものは、齒か第一であるから、先つこれに命名したのか、韓語では廣く骨の總名となり、我國語にては、骨は齒の根であるといふ考から、齒根^{ふち}即ち hōne といふ語が出來たものであらう。丁度、胸か手足の分かるゝ基部になつて居るから、身根^{みね}即ち mine といふ名を得て居るのと同じ構造である。

(4) 國語 ha——韓語 pa 國語豆爾波の ha は、今日では獨立の意義はないか、萬葉には多く者の字を宛てゝ居る(「吾行者^{ワガユキヤ}久者^{ヒサヤク}不有^{ヒナク}の類

意味の pa があるから、多分同語であらうと思はれる。
(5) 國語 hachi——韓語 pōr 國語 hachi (蜂)と韓語 pōr (蜂)とは、あまり似て居らぬ様であるか、實は同語である。國語 h 音と韓語 p 音との同値なることは、既に前條に説いた通り、又國語 eh 音の原音 t か、韓語 r 音と關係のあることも、十分説明が出来る。我國の音韻學者か、昔からタナヲ同等と唱へて居る如く、t n r の三音は共通の性質があつて、屢相通することがある。敦賀^{ツルガ}、播摩^{はま}、平群^{へいぐん}の敦・播・群は、何

れも n 音が r 音となつた例で、薦ツル・綱ツナ（石綱イソツナと讀ませたる例あり）・蔓ツルは、t n r 相通の例である。韓字音秩ohir・設set（stot）と、地名秩父チフ、設樂セツラクの字音、國語 nidasu（水）と韓語 nur（水）の様に、兩國語間にも、t r 兩音の交替があるから、hachi（蜂）と por（蜂）との、同語たることも明白である。

(6) 國語 hano — 韓語 paian 蛇ヘビ・飯匙ヘシ・蝮蛇ヘビ・鱧ハナは皆同源から出た語で、韓語 paian（蛇）と連絡がある。

(7) 國語 hara — 韓語 para 國語 hara（原）・haruka（遙）・hiro（廣）・hari（壘）・haru（晴）等には、共有の語根があると思はれるか、韓語にも para（望）・paro（直）・pori（列）の如く、意義と形の相似た語がある。

(8) 國語 hato — 韓語 pi-tark 國語 hato（鳩）は ha-tori の畧言で、韓語 pi-tark 同語であらうと思ふ。さて、國語 tori は鳥類の總名であるか、韓語 tark は鶏のみの名である。何れか元であらうかは暫く疑問として置いて、韓語 tark は 國語 tori に比して、語尾に k 音が一つ多い。此 k 音は、日韓語とも鳥名の語尾によく見る音で、國語 kari（雁）— 韓語 kiro-ki（雁）の様な例もあり、又國語 sa-gi（鷺）・si-gi（鳴）・tsu-ki（桃花鳥）・saza-ki（鷗鵜）などもあるから、或はこの k 音は鳥類の總名であつたかも知れぬ。

(9) 國語 *hige* — 韓語 *hi* 國語 *hi-ge* (髭) の *ge* か毛髮の義であらうことは、誰しも考へることであるか、*hi* は何であらうか。韓語で口を *hi* といふから、*hi-ge* の *hi* も口といふ古語ではあるまいか。 *hi-u* (云) といふ動詞は、韓語 *hi* (口) と同一語根から出来た語であるか、*me* (目) — *mi-ru* (見) / *te* (手) — *to-ru* (取) / *na* (名) — *no-ru* (宣) などの様に連絡した例もあるから、*hi-u* (云) に對して *hi* (口) といふ古語を考へるのも、強ち無理ではあるまい。

(10) 國語 *hiraku* — 韓語 *park* 國語 *hiraku* (開) は *haru* (晴) といふ動詞と同じ語根から出た語で、朝開 *asahikaku* など用ひた例もある。(第七例参照) 韓語 *park* (明) も、*para* (望)・*pori* (開、列) から轉したものらしく、兩々相照して考へるに、頗る似た所がある。

(11) 國語 *hukube* — 韓語 *pak* 國語 *hukube* (瓢) は韓語 *pak* (瓠) と同語で、語尾の *be* は、*na-be* (鍋) / *tsuru-be* (釣瓶) / *imu-be* (忌姿) / *ihahi-be* (齋瓮) などの *be* と同じく、容器の古語である。

(12) 國語 *hure* — 韓語 *por* 國語 *hure* は村の古語で、*ihare* (石村)・*nahori* (直入)・*kaheru* (鹿森)・*nabari* (名張)・*kaharu* (香春) など、古代の地名に其類音が多い。韓語 *por* も村の義で、夫里・弗・不離・伐・卑離など、様々の文字で表はした例か、彼地の古史に見えて居る。此 *hure* (村) の大きなものを *ko-hure* (大村) と稱へたもので、それ

か轉して *kohori* (郡) となつたのである。韓語 *koeur* (郡) は、稍其形か轉訛して居るか、矢張構造は一つである。それ故、郡村の制度は、餘程古くから、兩國に通じて行はれたことと思はれる。

(13) 國語 *huru* — 韓語 *pur* 國語では、雨を *huru* (降) といひ、風を *huku* (吹) といふか、韓語では、風に *pur* といふ語を使ふ。しかし、萬葉に山吹花を山振と書き、古事記にも振風比禮と見えてあるから、古くは、我國でも風を *huru* といふたものと思はれる。

(14) 國語 *imu* — 韓語 *muip* 此兩語とも忌の義であつて、韓語の語尾の *p* 音は、國語で所謂波行の延言、例へば、*toru* (取) — *tora-hu* (捕) — *utsu* (打) — *uta-hu* (歌)、*negu* (祈) — *neg-hu* (願) の類の *hu* 音に相當するものである。

(15) 國語 *ka* — 韓語 *kho* 韓語 *ip* (口) — 國語 *ihu* (云) と同じく、國語 *ka* (香)・*ka-gu* (嗅)・、韓語 *kho* (鼻) とは、同根の語と思はれる。又韓語 *kui* (耳)・國語 *ko-we* (聲)・*ki-ku* (聞) も、これと同型の語で、國語では肩より擔ぐ、綱より繫くの如く、名詞より轉して、加行に活く動詞があるから、此等も其一例であらう。

(16) 國語 *karu* — 韓語 *ka* 國語 *saku* (避)・*sa-ka-ru* (離)・*ma-ka-ru* (罷) 等の語根 *ka*・、韓語 *ka* (行) とは同源の語であらう。

(17) 國語 *ka_{ju}* — 韓語 *ka_{ji}* 國語 *ka_{zu}* (數)・*ku_{sa}* (種)・*ka_{ji}* (種類) 〃
は、無論同源の語である。

(18) 國語 *kin* — 韓語 *kar* これは國語 *ka_{hu}* (買) — 韓語 *kap* (價) な〃、同じ
關係の語で、彼方の物名か、此方では其物の作用を示して居る。併し、國語にても、太刀
は截り斷つよりの名で、劔も都牟刈の約言で、斬る有様を形容した語である。

(19) 國語 *kohu* — 韓語 *kop* 國語 *kohu* (戀)・*ku_{ha}-si* (美) は、いつれも韓語
kop (美) 〃關係がある。*ku_{ha}-si* は美〃いふ古語で、馨 (香美)・麗 (心美) な〃用ひら
れて居る。

(20) 國語 *konami* — 韓語 *kheun_{omi}* 國語 *konami* は嫡妻の義で、字鏡に嫗の字を
宛ててあるのも、女君の合字であらう。此語は、丁度、今日の韓語 *kheun_{omi}* (本妻)
に一致する。*kheun* は國語嚴な〃同しく、大の義で、*omi* は國語 *imo* 〃同しく、女
の義である。それ故、*kheun_{omi}* は大婦の義で、つまり *konami* 〃いふのは、嫡室を表
はす日韓共通の古語である。

(21) 國語 *koyomi* — 韓語 *hai* 國語曆は日讀の義であり、又二日・三日の *ka*、霞
(日染の義) の *ka* な〃、いつれも日の義で、韓語 *hai* (日) 〃一致する。

(22) 國語 *made* — 韓語 *mit* 國語 *made* (迄)・*mi_{tsu}* (滿) は同根の語で、物事の至

り及ふ義を表はして居る。之に對する韓語には、mit (及)・mir (滿) がある。

- (23) 國語 mane — 韓語 man 國語 mane は普の mane て、韓語 man (多) と同

し語根である。國語 momo (百) も、多分之と關係かあらう。其他國語 moro (諸)・mure (群) — 韓語 mora (都)・muri (儕) なにも、同一部類に屬すべきものと思はれる。

- (24) 國語 sinto — 韓語 seu 國語 sinto は si-hito の約言て、其 si は韓語 seu と一致する。これは多分男性を表はす 國語 se 韓語 sin と同語で、男性即ち夫の關係を示したものであらう。

- (25) 國語 soko — 韓語 sok 國語 soko (底) の古義は、恐らく sok-u (退、離) て、天雲の曾久方の極、山河の曾岐敵を遠み」などの如く、遠く離れたる處を示したものであらう。若し然らば、韓語に於て外面に對する内部を so といふのこ、意味が近いやうに思はれる。

- (26) 國語 take — 韓語 tai 檜・椿・柳などの語尾にある ta は木の義で、國語にはこれと同様の例が甚だ多い。take も其中の一で、その本名 ta は韓語 tai と一致する。ikada (筏) も、或は大竹の義ではあるまいか。韓語では、これを toi といふ。

- (27) 國語 uhanari — 韓語 myonari 國語 uhanari は、後妻の義を考へられて居るか、字鏡に嫌の字を宛てゝあるのも、兼女の合字で、恐らく妾の古名であらう。uhanari

の^ニは 上の意で、上下を以て前後を示した例には、後夫・前夫^{ウツブ}などもある。それ
て、hanari は韓語 myōnari (嬬) と似て居るから、uhanari の原義は後婦で、即ち、嫡
妻の後に娶つた妾を稱したものであらう。

(28) 國語 vase — 韓語 o: 國語 vase は、専ら稻につきていふ稱呼となつて居る
か、本來は和佐芽子・和勢粟^{ワサヘザ}など、廣く用ひられて居る。それ故、vase は早の義で、韓
語 o: (早) と同語である。

以上述べた單語の比較によつて、畧は日韓兩國の音韻的關係が明かになつたことと思
ふか、今そのうちで、殊に注意すべきものを擧げると、

第一 韓語の h 音は 國語では必ず k 音となる。

まづ字音に就いていふに、gaku (學)・kan (韓)・kai (海) の如きは、韓語ではみな hak,
han, hai と發音する。これと同様の關係か、また日韓の國語間にも見られる。即ち前にも
説明した二日三日の ka、曆の ko、朝爾食爾^{アサ} (朝に日にの意) の ke など、みな日
といふ意味であるか、之に對する韓語が hai であるのを見ても、此關係が認められる。
また、此 k 音は往々略せられる事がある。大分は碩田^{オホキタ}も書いて、古くは ohokita て
あつたのを、ohota とも、秋鹿 (akika) を aika、わさためなをわいためなし
讀む類、甚だ多いか、國語 tori (鳥) を韓語 tark といひ、國語 kari (雁) を韓語 kiro-ki

こいふのも、此例である。

第二 た・な・ら (t n r) 同等。

n r 三音の性質が甚だ相近い事は、兩國語共通の事實で、これは比較研究上常に注意すべき事柄である。この事は、既に前條（第一六九頁參照）にも説明して置いたか、なほ讃良 (san-ra) を sarara、丹比 (tan-bi) を tadjhi、稻荷 (ina-ni) を inari といふ例もある。

第三 r 音語頭に立たす。

此事實も亦兩國語の特質である。國語で、露西亞をおろじや といふ如く、韓語でも arasa といふて、語頭に r 音の來るのを避けて居る。

この r 音も、語中において、屢々省略せられる。鳥網、狩野、作物所の如き例は夥しくある。韓語でもまた、tark (鳥) を tak、heurk (土) を heuk とも發音する。今日の ap (前) といふ語の、古く arp に見えて居るのも亦その一例である。

國語羅行變格動詞 aru (有) に對する韓語は aru であるか、これも動詞活用の場合には、r を失うて i となる事が多い。また、韓語 kuram (雲) は、國語では kuno (雲)、kuna (隈) となるか、之に反對に、國語の kuro (黒) を、韓語では kom といひ、且、蜘蛛を komeni、熊を kom といふか、此等か黒といふ意より出て居ることは、r 音

省略の結果といはねはならぬ。

第四 韓語 p 音は國語では必ず h 音となる。

元來、我國の h 音も、古くは p 音であつたのである。訓民正音に見えたる諺文の排列順は、わか五十音圖とおなじく、印度の音韻圖 (Devanāgarī) に基いたものであるか、今此三者を比へて見るに、五十音圖の波行にあたる處は、印度・朝鮮ともに p 音である。即ち、諺文の順序では k t n p m s y w r となつて居る。

國語では、h 音と w 音と屢相通するか、韓語でも亦そのこほりである。國語はつか (僅) かわつか、あわつ (周章) かあはつ、くつほる (壞) かくつをることなることおなじ調子に、韓語 pata (海) は我國では wata 又は wada となり、韓語の pat (受) は我國では wata-su (渡) となる。國語の古に、「受ける」の義に「渡す」を用ひた例は、古事記天真名井の宇氣比の段に、速須佐之男命乞度、天照大神所纏左御美豆良八尺勾瓊之五百津美須麻流珠而云々あるにて知られる。また、韓語動詞語根の p 音で終つて居るものと多くは、活用の際に其 p 音を w 音に變じて、例へば mup (愚) を miw とする。

其他、音韻の事については、また述べるべきことも多いか、今は唯た本論の説明に直接必要なものとみを擧げたまでである。

第二章 語法の比較

前章においては、専ら聲音の類似、換言すれば語の外形において、兩國語間に親族的關係のあることを述べたか、これより進んで、語の内面、即ち語法上の觀察に移る積りであるか、説明の便宜上、語を體言・用言・助辭の三種に分類し、其各箇について比較を試みようと思ふ。

第一節 體言

(一) 名詞

所謂體言の大多數は名詞である。歐語ではその語法上の形式を數・性・格の三つに分けて居るか、國語では助辭で格の關係を示すから、これは其條に譲つて、専ら數と性との二つに就いて、簡単に觀察をして見よう。

(一) 數 日韓兩國語ともに數を表はす特別の形式はないか、多數を示す場合には、普通は同語を重ねて用ひ、或は特種の接尾語を加へる。

國語

韓語

kuni-guni

(國々)

chip-chip

(家々)

hito-bito

(人々)

saram-saram

(人々)

hi-bi (日々)

na-nar

(日々)

tsuki-tsuki (月々)

ta-tar

(月々)

數を示す接尾語の中には、兩國共通のものがある。國語で友達^{トモ}、公達^{キンダチ}、御達^{ゴダチ}、女^メこち、思ふこち、犬^{イヌ}こちなこの tachi, dochi に對する韓語は teur て、これは生物無生物の別なく、通して使用せられる。

單數

複數

sarain

(人)

sarain-teur

mar

(馬)

mar-teur

chhaik

(書籍)

chhaik-teur

既に音韻の條で述べておいた通り、r に t とは、極近い性質の音であるから、たち、こちの原音 tai, dochi の t が韓語では r になつて居るので、tati n teur とは同一語根といはねはならぬ。なほ國語について考へて見るに、tsure (連) tsura (列) の如くたち、こちと同様に多數を示して居る語がある、此等を對照すると、一層右の teur との關係が明瞭になる。

國語 tsure (連) に對する韓語は tari である。また、國語で人數を數へる時に用ひる hu-tari (二人) mi-tari (三人) の tari も上記の諸語と同じく、もこは複數を示す接尾語で

あつたのか、ふたり、みたりなごから類推して、一人をも *hi-to* といふ様になつた次第で、丁度意 (心馳の義) から顔はせ、東 (日向の義) からみんなみ (南) を類推するご同し譯てはあるまいかと考へられる。

(二) 性 性も數ご同じく特別の形式ごてはない。もし、男女の別を立てる必要かあれば、男或は女といふ意義の語を、語頭又は語尾に附けてこれを區別するに過ぎぬ。

國語て男女の別をあらはすために用ひられた語の中に、*imo-se* といふのがある。例へは、これを人といふ語に冠らせて、*imo-hito se-hito* といふ語を作るのである。これか轉して *imo-nto se-nto* となれば、兄妹の意となり、*imo-se* といへは、夫婦のことになる。しかし、本來は男女といふ概念を表はした語て、弟か姉に對しても、*imo* といふた例もある。これは丁度、弟 (*oto-nto*) か、*ato-hito* (後人) の轉した、*oto-hito* の更に約つたもので、古くは兄か妹に對してもなほ *oto* と呼んで居たのと同じ關係である。*imo-se* に相當する韓語は、*am-su* であるか、これは一般の動物にのみ用ひて居る。

<i>so</i>	(牛)	<i>am-so</i>	(牝牛)	<i>su-so</i>	(牡牛)
<i>tark</i>	(鶏)	<i>am-tark</i>	(牝鶏)	<i>su-tark</i>	(牡鶏)
<i>kai</i>	(犬)	<i>am-kai</i>	(牝犬)	<i>su-kai</i>	(牡犬)

國語の *imo-se* は人類はかりに用ひられて居る様に見えるか、*su-kai* (牡鹿) に對して

he-ka (妻鹿) のあることは、明かに他の動物にも此語を通用した證據である。鹿の本名が ka であることは鹿の子、「妻こひに鹿なく山への秋萩は」などの例に徴して、更に疑の餘地かない。其他、めうか、せうかの如きも、牝薑、牡薑の義であるといふ説もある。

(二) 代名詞

代名詞の中、先づ人代名詞を比較して見るに、今日の韓語では、一人稱を na といふか、古くは我國の古語と同じく、a であつたといふ事については、既に先輩の論がある。其複數の uri も、國語の wa-re と形の上では似て居る。二人稱の韓語は no であつて、此は我古語 na 一致する。

指示代名詞には、國語 ka (彼) so (其) に對して、韓語 ken (其) cho (彼) がある。ken は ka に、cho は so に、關係があるらしく、指示の遠近に差があるのみである。

疑問代名詞にも、國語 idsu-ko (何處) idsu-chi (何方) itsu (何時) などの、itsu に相當する ot といふ韓語がある。此語も時・處などを表はす語と複合して、otai (何處) ot-chi (如何) など用ひられて居る。

國語

韓語

a, wa-re (我)

a, uri

(我)

na	(汝)	nô	(汝)
ka	(彼)	keu	(其)
so	(其)	chô	(彼)
idsu	(何)	ôt	(何)

(三) 數詞

日韓兩國語は、種々の點において、甚だ近い關係のあるにも干らす、たゞ數詞だけは甚だ一致か尠い。されは、アストン氏の如きは、彼我兩國語は數詞の成立以前に分離したものであらうと論じて居る。然し、現在の數詞のみについては、如何にも其組織を異にして居る様に思はれるか、數の根本なる語においては、また尠からぬ類似を見るのである。

先づ國語 kazu (數) に對する韓語 kajji (種類) を始めて左の如き類語がある。

國語 韓語

yoro-dsu	(萬)	yôro	(衆)
moro	(諸)	mora	(都)
mure	(群)	muri	(儕)
mane-si	(普)	man	(多)

mina

(皆)

nan

(多)

それ故、今日の數詞の上にこそ類似はなけれ、その基たる數の概念に關係のある語は、此とほり一致して居るのである。

第二節 用言

(一) 名詞法

我國語に於て、後世には漸く其數を減したけれど、古くは動詞・形容詞から名詞を作つた例が夥しくある。この活用言から名詞をつくる形式か、また兩國語間に符合して居る。

第一 i 語尾の名詞法 これは國語の utah-i (謠)・samurah-i (侍)・ob-i (帶)・tatami (疊)・hasami (鋏)・ami (網)の類で、古くなるほど用例が多い。弓を mi-torasi (御執)・刀を mi-hakasi (御佩)・顔色を omoheri (思)・しひ、「霜の降 (hur-i) はも」聞 (kiki)のかしこく」などいふは、後世には珍らしい形である。然るに、韓語では此名詞法が今なほ廣く行はれて居るのみならず、形容詞にも通して用ひられて居る。

tat

(閉)

taji

(障子)

nor

(遊)

nor-i

(遊戲)

ur

(泣)

ura-i

(雷鳴)

kör	(步)	kör-i	(街路)
töp	(暑)	töw-i	(暑氣)
chhip	(寒)	chhiw-i	(寒氣)

これはあまり専門に偏する事柄ゆゑ、詳細に亘つては述へ難いか、全體國語で動詞・形容詞と、兩分せられた活用形か、韓語ではいつも一に集つて居る。動詞・形容詞を通して i 形名詞法のある事も其一例で、此後にも讀者は同様の事實を屢々見るであらうから、特に留意を促して置く。畢竟、國語の動詞・形容詞は一元から出たもので、韓語は其本來の形式を保存して居るものと考へられるのである。

第二 ni 語尾の名詞法 此名詞法は、國語では tanosi-mi (樂)、yasu-mi (安)、kurusi-mi (苦)、yo-mi (嘉)、to-mi (夙) の如く、形容詞にのみ屬して居る形であるか、韓語では動詞・形容詞に通して行はれて居る。例へば

chi	(貢)	chi-m	(荷物)
kör	(步)	kör-m	(步調)
pur	(吹)	par-m	(風)
sar	(生)	sar-m	(人間)
kira	(養)	kira-m	(脂)

nira	(謂)	nira-m	(名稱)
pit	(櫛)	pit-eu-m	(雲脂)
tara	(異)	tara-m	(餘事)

之に依て更に我國語を觀察して見るに、kaku-mu (圍)、tari-mu (弛)、saku-mu (裂) な
こいふ語は、asa- (淺) より asa-mu (嘲)、iso- (忙) より iso-mu (勇) か出たと同じ徑
路を踐んで、kaku (垣)、tari (垂)、saku (裂) より出來たもので、其發展の中間には必ず
三形の名詞法があつたに相違ないを考へられる。

第三 ku 語尾の名詞法 國語において今日殆んど慣用的に用ひられて居る、曰く
(ina-ku)、思はく (omoha-ku)、願はく (negaha-ku)、問道 (kikunara-ku) 等の、ku 語尾
の名詞法かこれである。此語形は從來延言を稱へて、語の舒ひたものこそせられて居るか、
今これを名詞法の一つとして説かうと思ふ。

此語形も後世には漸々減つてしまつたか、古代には頗る多かつたもので、「見らくす
くなく戀ふらくの多き」、世の中のうけくにあきぬ、見まくのほしき、行かくも知ら
に」の如き、皆この例である。之に對する韓語の名詞法は 三 語尾で、これも動詞・形
容詞に通じて用ひられる。例へば

sar	(生)	sar-ki	(生活)
-----	-----	--------	------

po	(見)	po-ki	(外貌)
töp	(暑)	töp-ki	(暑氣)
ehhip	(寒)	ehhip-ki	(寒氣)
nor	(遊)	nor-ki	(遊戲)
mök	(食)	mök-ki	(食事)

yo-ge (善)、uresi-ge (嬉) など、形容詞の語根について名詞を作る 명 も或は此名詞法と同一のもてはなからうか。

(二) 副詞法

國語に二種の副詞法がある。其一つは専ら動詞にのみ屬するもの、即ち kōhi-negahn (希)、kaheri-miru (顧) の kōhi (乞)、kaheri (歸) の類である。文章法上、常に用言に續く故、普通にこれを連用言と稱へて居るか、確かに副詞的の性質を帶ひて居る。韓語にも亦 i 語尾の副詞法があつて、これは概ね形容詞に屬して居る。

sui	(易)	sui-i	(容易く)
mör	(遠)	mör-i	(遠く)
man	(多)	man-hi	(多く)
kip	(深)	kip-hi	(深く)

chyök	(少)	chyök-i	(少く)
kat	(同)	kat-chi	(如く)

今一つは、國語で形容詞に限られて居る ku 語尾の副詞法で、例へは yoku (善)、chika-ku (近) の類である。しかし、此副詞法も本來は形容詞ばかりでなく、動詞にも通して用ひられたもので、「やむ時もなく戀ふらく (kohura-ku) 思へは」などの例がある。之に相當する韓語の副詞法は、koi を語尾とするもので、動詞・形容詞の別なく用ひられて居る。

kat	(同)	kat-koi	(如く)
man	(多)	man-khoi	(普く)
chyök	(少)	chyök-koi	(少く)
chop	(狭)	chop-koi	(狭く)
ka	(行)	ka-koi	(行かく)
nira	(謂)	nira-koi	(宣く)

かくの如く、二種の副詞法は兩國語とも殆んど同形である。たゞ其所屬の、我國語では動詞・形容詞のいつれかに限られて居るのに、韓語では此差別なく、双方に通じて用ひられて居るといふ相違があるばかりである。

(三) 有あいふ動詞

國語で *ari* (有) といふ動詞は、動詞活用 of 全部に通じて様々の大切なる役目を勤めて居る。例へば、*honer-aru* (譽)、*mir-aru* (見) の如き受身動詞、*yukeri* (行)、*ose-ri* (押) の如き半過去動詞、なり (*na-ri*)、たり (*ta-ri*)、けり (*ke-ri*) の如き過去助動詞などは、いづれも此動詞 *ari* の力に依つて出来て居らぬものはない。其他、*kage* (蔭) より *kage-ru* (蔭)、*une* (畝) より *une-ru* (曲)、*yado* (宿) より *yado-ru* (宿)、*kumo* (雲) より *kumo-ru* (曇) の出来る様に、名詞から動詞を作る場合にも、*ari* の複合に依るこゝが多い。

此關係は直にこれを韓語に移して論ずる事が出来る。國語 *ari* に對する韓語は *go* である。然るに、*r* 音は脱落し又は *t* 音に轉し易いから、此 *go* も *i* 又は *go* なる。この *go* の母音が變じて *o* となる、他動の意味になつて國語の *eru* (得) にあたる語が出来る。かやうに韓語の動詞有あには種々の形式があるか、その根本を問へば、やはり國語 *ari* に相當する *go* といふ形に歸着するのである。

此韓語 *go* も亦 *ari* か國語における如く、動詞活用 of 種々の方面に活動して、影響の甚大なものがある。例へば半過去助動詞 *to-ru*、過去助動詞 *nita* の如きは、みな此 *go* の複合である。

國語

韓語

ari	(あり)	ir	(有)
tari	(たり)	tōra	(半過去助動詞)
nari	(なり)	nira	(過去助動詞)

其外他の動詞の語根に結合して、其自他を變し所相・使役相を作りなごすることは、
すへて國語 *ari* と同様である。

(四) 受動・自動・他動の構造

國語の所相は動詞語根と動詞 *ari* (有) との複合して出來たもので、例へは *yurus-aru* (許)、*homer-aru* (譽) の如きも、*yurus-u*, *hom-u* に *ari* の合併したものである。

能動

受動

<i>mir-u</i>	(見)	<i>mir-aru</i>	(見らる)
<i>os-u</i>	(押)	<i>os-aru</i>	(押さる)
<i>oboy-u</i>	(覺)	<i>oboyer-aru</i>	(覺えらる)

動詞の自他を差別するにも、これとおなじ構造を採つて居る者が多い。例へは

自動	他動
<i>sut-aru</i>	<i>suts-u</i>
(廢)	(捨)

hasi-ru	(走)	has-u	(馳)
kaha-ru	(代)	kah-u	(替)
suwa-ru	(座)	suw-u	(据)

韓語でも、亦これとおなじ方法で、受動を作り自他を分つのみならず、使役の意をも表はして居る。たとへば

chap	(捕ふ)	chap-i	(捕へらる)
po	(見る)	po-i	(見ゆ)
na	(出つ)	na-i	(出す)
ssa	(積む)	ssa-i	(積る)
sok	(欺く)	sok-i	(欺かる)
chuk	(死ぬ)	chuk-i	(殺す)
cha	(寐ぬ)	cha-i	(寐しむ)
mök	(食ふ)	mök-i	(食はす)
ar	(知)	aro-i	(奏)

此の如く、動詞^三 (有) か活用の中に交つて最も重要な務をして居ることは、兩國語ともに毫も異なる點を見ないのである。

(五) 敬語法

國語の敬語法には色々の種類がある。先づ受動と同様に、*miru* (有) の複合から出來たもの、即ち *mir-aru* (見)、*ser-aru* (爲) の類か一種、次には動詞 *su* (爲) の複合から出來たもの、即ち *toru-su* (執)、*mi-sasu* (見) の類もある。「此戸ひらかせ」、豊御饌たてまつらせ」の如きは即ち「開け」「獻れ」の敬語である。それで、*kikosi-me-su-seraru* といへば、聞く・見るといふ二動詞に、上記二種の敬語法を重ねたもので、*kikosi* は聞くの敬語 *kika-si* の轉したものの、*mesaseraru* は *mesasu* の敬語で、*mesasu* はまた *mesu* 即ち「見る」の敬語 *misu* の轉したものである。

以上二種の敬語法以外に、今一つ敬語法と思はれるものがある。其は波行にはたらく語で、例へば「家のらへ (*nora-he*)」「もうへ (*tsuka-he*)」「めへ (*mesa-he*)」を「宣る」、かくろへ (*kakuro-he*) 入りたまふ」「つかへ (*tsuka-he*)」を「うへ (*matsuro-hu*)」の如きは、何れも *noru* (告)、「*mesu* (召)」「*kaku-ru* (隠)」「*tsuku* (付)」「*matsu-ru* (奉)」の敬語と考へられるのである。此點に就ては、琉球の方言を参照する必要がある。即ち琉球語の敬語法はこの波行の活用であつて、例へば國語 *yobu* (呼) に對する *yubung* の敬語法は *yuba-bing*、國語 *toru* (取) に對する *tuyung* の敬語法は *tuyu-bing* で、丁度國語 *yoba-hu* (呼) *toru-hu* (捕) と同じ構造である。さうして韓語には、以上述べた三種の敬語法が悉く備つて

居るのである。今此等の敬語法に就て、日韓琉の三語を比較して見るこゝ、

第一 動詞 *sin* (有) の複合せる敬語

常語

敬語

國語

mir-u

(見)

mir-aru

yuk-u

(行)

yuk-aru

yom-u

(讀)

yom-aru

韓語

ha-o

(爲)

ha-o-i

i-o

(有)

i-o-i

po-o

(見)

po-o-i

mo-o

(遠)

mo-o-i

右の中、韓語の語尾にある *i* は *hi* (有) の省略せられたもので、國語 *sin* (有) と同根の語たることは、既に前節に述べた通りである。

第二 動詞 *sin* (爲) の複合せる敬語

常語

敬語

國語

tor-u

(取)

tor-a-su

kik-u

(聞)

kiko-su

mes-u	(召)	mes-su
moi	(侍)	moi-si
ant	(坐)	andjeu-si
ha	(爲)	ha-si
po	(見)	po-si
tanni	(歩)	tanni-si

韓語の動詞には、國語 *si* (爲) と同一語根らしい語は現存しては居ない。しかし、使役相「爲しむ」の意義に用ひらるゝ *si-ki* といふ動詞がある。然るに、此 *si* といふ語尾は、次の諸例に見える通り、使役の意を表はすに用ひられて居る。

ant	(坐る)	ant-ki	(坐らす)
kam	(浴む)	kam-ki	(浴みさす)
nöm	(溢る)	nöm-ki	(溢れさす)

それ故、*si-ki* といふ使役相から類推して、*si* (爲) といふ古語を推定することか出来る。

第三 波行に活用する敬語

常語	敬語
國語 yobu	(呼) yoba-hu

	kakuru	(隱)	kakuro-hu
韓語	ant	(坐)	andj-äp
	pat	(受)	patch-äp
	poi	(會)	poi-op
	hä	(爲)	hä-op
琉語	tuyung	(取)	tuyä-bing
	yubung	(呼)	yuba-bing

此の如く、敬語法に於ても、日韓兩國語は符合して居るのみならず、二重三重に敬語を重ねる事も、彼我同一徹に出て居るので、例へば、國語で *kik-u* (聞) *kiko-su*, *kikosimesu*, *kikosimesaru*, *kikosimesaseraru* 等々如く、韓語でも *hä* (爲) *hä-si*, *hä-si-op* *hä-si-op-si* 等、幾重にも重ねて敬意を深めるのである。

(六) 時に關する助動詞

國語半過去助動詞 *tsu* 即ち「なか／＼し日を今日もくら／＼」、柳のうれに鶯のなきつ」の如き場合の *tsu*、或は之に *si* の複合した「御垣か原は霞こめたり」の如き場合の *si* に對する韓語は、*si* 及び *si-tä* であつて、おなしく半過去の意がある。*si* を終止法に用ふる場合はないか、*töra* の方は *ir-töra* (有たり) の様に用ひられる。

また國語過去助動詞 *ㅆ* に對しても、直接に比較すべき韓語にてはないか、動詞の連體法に過去の意を示す *n* 語尾があつて、半過去の *ㅆ* に對して *toira* のある如く、此 *n* にも *nira* といふ形がある。それで次の如く

tark-ira

(鶏あり)

tark-toira

(鶏たり)

tark-nira

(鶏なり)

三様の區別がある中で、第一の場合は「鳥あり」といふに當り、第二は「鳥たり」に相當し、第三はまた形式上國語指定の助動詞なりに酷似して居る。あまり専門に渉る事は成るべく避ける積であるから、詳しくは述へ難いか、從來、過去助動詞 *ㅆ* からけりか出來、半過去助動詞 *ㅆ* からたりか出來、未來助動詞の *ㅆ* からめりか出來たと考へられて居る。此見解よりすれば、指定の助動詞なりも亦正に過去助動詞 *ㅆ* から出來たもの、即ち韓語の *nira* と同一構造のものと見るここから出來ようかと思ふのである。

ki (過去)

keri

mu (未來)

meri

tsu (半過去)

tari

nu (過去)

nari

尙一步進めていへば、此なりを普通にありの約言たとして居るか、其にこいふ旦爾遠波其ものも、過去助動詞ぬから出たものと考へられるのである。

國語てにけり、たりけりなご、助動詞を重ねることある通り、韓語ても亦それと同様に、hi-to-ni-ra (ありにたり) の如く、重ねて用ひることがある。

(七) 打消法の比較

國語について考へると、打消助動詞ず、ぬ、ね活用中の nu, ne、禁止の副詞 na (「な散りみたれそ」な來そ)「な行き」の類)、其他、形容詞 nasi、副詞 ina、及び、ぬ、ね活用中の變化と見らるべき、「いへはえに」不知の ei なご、すべて所屬こそかはれ、打消をあらはす作用は同一である。尙其他にも、ani (豈) といふ語がある。これも「價なき寶といふこも一杯の濁れる酒にあにまさらめや」の如く、打消の意が含まれて居る。又疑問代名詞 nani (何) にも、「花にあかてなにかへるらむ」の如き場合には、打消の意か窺はれる。そして、此等の語はすべて一つの根元に歸する事であらうと考へるか、韓語ても打消は此等と類音の ei を以て表はして居る。たゞ國語と異なる點は、必ず打消されるべき動詞の前に、打消の語を置くことである。丁度、國語で禁止をあらはす na-juk (勿行)、na-ko (勿來) の様な用法である。

惟ふに、國語の「な行き」か後に「行くな」となつた如く、すべての打消の語は「豈

まさらめや」の如く、語の先頭におかれて居たのか、後に轉倒して用ひられる様になつたもので、此點についてもまた、琉球語は參考の價值がある。即ち琉球語では、打消語の位置が二様に別れて居て、國語 *aranu* (不有) といふ語に對して、*arang* の *nearang* ンの二つの形式がある。

國語 *ari*

(有)

aranu

琉語 *ang*

(有)

arang
ne-rang

韓語 *in*

(有)

an-ir

それ故、日韓琉の三語を比較して見ると、韓語は古體を存し、琉球語は過渡時代を表はし、國語は最も變化したる状態にあるものといはねはならぬ。

比較研究上、今一つ不可能をあらはす打消法か、日韓兩國語に通してある様に考へられる、即ち、韓語の *mot* の國語の *imada* といふ副詞にてある。此 *imada* といふ語は從來「今だに」の約といふ説ではあるか、「いまた見ぬ人にも告げむ」、まだふみもみす」などの如く、必ず下に打消を伴ひ、形容詞となつてはまだし、まだしき(時鳥まだしきはこの聲をさかはや)となり、四段活に活用しては「わか名はまだき立ちにけり」、おもかけにのみまだき見ゆらむ」など、いづれも「未だ之に及はす」この意に用ひられるのであるから、*mot* の間に關係のあることは考へ難くはない。

第三節 助 辭

此處に助辭といふのは、所謂豆爾波のみでなく、獨立しては何等の意義もなき語の汎稱である。しかし、此等の語も本來は獨立の意味を備へて居たのであるから、研究を重ねたならば、何時かは其語源に達することの出来る譯である。この點からも、日韓兩國語の比較研究は貴重なる資料となるのである。

(一) 主格を表はす助辭

國語には名詞の下に附くいといふ助辭がある。「紀の關守い」、家なる妹い」、けなの若子い」の如きいは古くから用ひられて居るか、本義はまた十分明かでない。然るに韓語では、名詞の主格をあらはす爲に、今日も此 *i* を用ひて居る。

mur

(水)

mur-i

(水が)

kas

(帽)

kas-i

(帽が)

tark

(鶏)

tark-i

(鶏が)

加之、國語において「これを持ついはほまれをいたし、棄つるいはそしりをまねく」の如く、動詞の下にいのついて之を名詞化する場合のあると同しく、韓語にも次の如き例がある。

han-an-i

爲てゐる人

ha-n-i

爲た人

ha-r-i

爲る人

國語の名詞法、使 (tenkah-i)、侍 (samurah-i)、網 (mi-i) の如きも、要するにこれと同型の語で、上記諸種のいは畢竟同一語源に歸するものであらう。また國語の主格助辭に對しては、韓語も全く同様である。

so

(牛)

so-ka

(牛が)

pata

(海)

pata-ka

(海が)

uri

(我)

uri-ka

(我が)

それで、二種の主格助辭についても、兩國語間の關係は殆んど疑ふへからざるものがある。

(二) 領格を表はす助辭

國語にて領格を表はす古い助辭につぎいふのがある。例へは、天つ風、庭つ鳥(鶏)、濡つ串、毛た物(獸)、木た物(菓實)、面つ邊(表) なこのつ、たか即ちそれであるか、韓語にも往々此古形が残つて居る。例へは

pata-t-mur

海つ水

pai-t-saram

船つ人

no-t-nara

魯の國

(三) 造格を表はす助辭

造格 (instrumental case) を表はす助辭は、國語では今日特別の形はないか、韓語では *no-t-ni* といふ助辭を用ひてこれを表はして居る。即ち

pai

(船)

pai-ro

(船にて)

mar

(馬)

mar-ro

(馬にて)

pata

(海)

pata-ro

(海より)

此 *ro* と同じ起源の語が國語にもあつたのではあるまいかと思はれるのは、今日の方言に「舟から行く」、馬から行く」といひ、書紀に「浮於海を」「ふねからにゆく」、浮江を「川ふねより」と訓し、萬葉に「馬より行くに」、徒歩より行けは」、古事記に「腰なつみそらはゆかす足よ行く」といふ様な用法の見えることである。

此からのかは處の意で、住處、岡(峽處)、陸(國處)、都(宮處)なこのか、こはみな處の意である。また、よりも屢々りを略して、「田兒の浦ゆ」、いにしへよしぬひにければ」の如く用ひられる。此等を綜合して考へて見れば、結局からのら、よりのりは引離して考へるここが出來ようと思ふ。

また、からといふ語はある一點を離れる意味のものであるか、「友がり」、妹がり」な

このかりといふ語は、またある一點に向つて進むことを表はして居る。此二つの語は、進行の方向においてかくの如く差異はあるか、根本の意義は同様で、かには處の意か認められる。即ち其りも古くは別箇の助辭であつたことか出来るのである。

身みつ處から（自）、己おのつ處から（自）、手てつ處から、口くちつ處からの類も上例と同一の解釋を下せは、何れもらといふ古助辭の存在を證明する。なほ「枝ながら見よ」のながら、「花見がてら」のがてらがてららなともさうて、がてらがてららのがてらは接續詞かつ（且）、副詞的助辭ごご（如）と同じく、物の同一關係にあることを示すものである。即ち、「花見がてら」といへば、花見と他の事柄とを同等に見做していふのであるから、此らも亦がてらから分離することか出来る。

其他、「夜のほごろわか出て來れば」なごのほごろのろ、さかしらのらなごを参照して考へれば、ますく韓語の마に對する助辭の、古く國語にもあつたことか認められるのである。

（四）詠嘆を表はす助辭

國語で詠嘆・願望の意を表はすにはかな、かもなごを用ひて、「たのもしきかな」、あそびくらさな、「雨なふりそね」、「いでし月かも」、「春の柳か」、兒らはあはなも、「今しくやしも」なごといふか、韓語にも *lo* 又は *kona* といふ詠歎の助辭がある。例へは *ilo*

kona は國語に直譯すれば、あるかなてあつて、「身のさかり人ごもしきろかも」、小夜床をならへむ君はかこころかも、「今のうつゝにたふごころかも」の如きろかもなごこは確かに比較の價值がある。

國語 韓語

ka ko

kana kona

rokamo rokona

(五) 疑問を表はす助辭

國語の疑問を表はす助辭に や、かの二種があつて、やは終止を受け、かは連體につづく、「ありやなしや」、あるかなきか、「來やくこ」、「來るかくこ」の如き類であるか、韓語にも亦おなじく ya, ka の二つがある。其中 ya には一定の制限があつて、連體言の未來を受ける場合には必ずこれを用ひることになつて居る。

國語 韓語

su-ya hā-nān-ya

si-tari-ya hā-tōn-ya

su-ru-ka har-ka

此様に其形式用法の似て居るのみでなく、國語で此やの係を結ふは連體形に限つて居る如く、韓語にも亦 은 の係があつて、下を未來形で結ふ事になつて居る。

係結のことは今詳かに述べることも出来ぬ。たゞ、國語に ぞ、なむ、や、か、こそ がある係の中、韓語には 야、たけ、琉球語 には ぞ、や の兩者とも幾部分かを存して居るから、從來の學者も説いて居る如く、こそ の係の最も新しいことは論するまでもなく、更に や を最も古しとし、ぞ、これ に次で發生し、こそ は最後に我國語において單獨に發生したものと いふ ことも出来ようかと思ふのである。

(六) 反對の意を表はす助辭

反對の意を表はす助辭 ども、ご のものは感動詞で、その本體は ご、ご であるか、韓語にもこれと同しく 고、이 助辭があつて、次の様に用ひられる。

國語

韓語

are-do

ira-to

tare-do

torai-to

此外、文章法上語句排列の順序を始とし、特殊の成語に到るまで、類似の箇條は甚だ多い。寧ろ、根本的に組織の異なる點を指摘するに苦しむ程である。

本論文起草の趣旨は、既に序説にも述べた通り、特殊の専門家よりは、寧ろ世上一般

の人士に對して、我國の保護國たる韓國か、その言語に於ても亦我國語の一方言たる實を存して居て、明に同文同語の國民であるといふ事實の一斑を示し、一には實際上韓國の施政教育の任に當つて居る人々の參考に資し、又一には東洋比較言語學研究の學術的興味を普及して、内には我國語學の發達を促す一助ともせんこの微意に外ならぬのである。それ故、あまり専門的のことは努めて之を避け、外部に現はれた顯著なる事實のみを擧げた積りである。

最後に著者一己の希望を述べて置きたい。外でもない、我國民は東洋諸國語、就中親族的系統ある韓國語に對して、從來極めて冷淡であつた。これは暫く學術的立脚點を離れて、實際的の事業上から見ても、甚だ悲むべき現象である。若し彼我兩國間にもつこ言語の疏通があつたならば、過去の政治上に於ける幾多の暗黒面も或は現はれずに濟んだかも知れぬ。かの大院君の激怒を買つて、幾萬の生靈を犠牲に供した耶蘇教徒殺戮事件も、實に佛國宣教師が韓語敬語法の使用を誤つたに基因して居るといふことは、後人の良き誠ではあるまいか。

幸にも日韓兩國の言語は、その根本において同一である。若し此間の消息を審かにしたならば、彼我國語の學習を容易ならしむること勿論である。此の如くにして、日韓兩國民が互に其國語を了解して、遂に古代の如く同化するに至つたならば、實に天下の慶

事である。吾人は、上下擧つて今一段の注意を言語の上に加へられんことを、切に希望するのである。

〔明治四十一年十二月稿〕